



浄土の精

初編上  
木宗  
粹

浄土の精  
大極楽

浄土真容編集



10

15

20

25





大塩平八郎謀  
 頭す  
 を見  
 貢

神の掛けぬは  
 物あるらん  
 武臣よ  
 たる勇か  
 らひあ  
 神祖の言  
 我  
 の八幡ありと  
 のまひん  
 平八郎  
 勝きこわ



けん  
 妻の娘  
 をばり  
 ありも  
 我家を

小見甘  
 の海忠  
 ありと平八郎  
 名付つち  
 三四才の  
 あり八九才  
 五を大人  
 らばま  
 好

【大塩】平左門 又剛雁の  
ありの武術をまま  
志むるよそのあま  
を極めすこの平左門妻

平八郎の才  
感一十四五才は  
ての学業おのつ  
宗大板まことと  
のむき坊学の大儒  
あけま六才坊学  
左門大塩頭及れく学  
の才



【大塩】平左門 又剛雁の  
ありの武術をまま  
志むるよそのあま  
を極めすこの平左門妻

平八郎の才  
感一十四五才は  
ての学業おのつ  
宗大板まことと  
のむき坊学の大儒  
あけま六才坊学  
左門大塩頭及れく学  
の才



【大塩】平左門 又剛雁の  
ありの武術をまま  
志むるよそのあま  
を極めすこの平左門妻

山あり然るも召連一僕のみも人々を  
 あり旅籠の風呂あびをせしむる時  
 をあつて一けを越し一歩のき場  
 て待めし後へ返付やさんと旅人は湯を足  
 ずよはれしを看ししに平八郎の格と  
 峰の半腹にまはりし頃あはれん  
 くの道をおび指と言ふるは  
 旅をよぬ人なりといひは  
 の有とありと往還を極めて  
 道ももはるを四丁の  
 終極は傍の松の  
 本陣より言ふ

平八郎自らとてこの  
 手をとりね  
 ち上げて

内せよと語りしに  
 らひりの人とお  
 どり此一言も西人と  
 も大ききいなり  
 よき小牌目  
 よもの見せんと  
 靴の小さなを  
 捕り如く胸に  
 ら格と取らるり



つ如くのあら  
 田力腰は一刀をよ  
 こへあらしむる  
 平八  
 あんの  
 心もつがす歩  
 返んとする程  
 よりの格人とも  
 ばせー平八郎とよ  
 び苗兩人左右にまをこり  
 衣類大小の取あきおとゆ  
 平八郎少も後手扱の汝も格人と  
 目も擲往來の人をみるす山城

や命を  
 ち  
 平八郎  
 身をく

刀揃をらあしとあらし  
 て刀の飛で其身も  
 こころの格人と成り  
 腰の一刀は技で成るるを  
 平八郎 身をく

透さす右腕を檢上と下結  
 を擽て傍らの松の大木にま  
 つけ平八郎さるる百眼汝人界

生ををくきあくの行をみす天  
 むんと身を免さんや今速  
 首を刎へるれど一命を



〇 賊けりあり 殺一言を耳とあり 悪念  
をひるころ 良民とあり 天倉を保つて  
といつ 敵さる刀を拾ひ取えどもあつと  
切掛ひえ事 なるいすす西のついで  
傷よ 都合平八 存心さる ぬ体よて 結人よ  
別色 しまつ 汝を 日人 若あつて  
とをわの ころよ 待よりとて  
結共よ 最ある 宿いぞりそ  
さゆり ころ 道中つが



〇 中へ 中へ 書者 若らつたりの 親族  
がへ 父よりの 書出を 出らん 親の  
もむ 親の 一書 あり 承知と 学  
大親の 由中 廻村 あり 舟鳥  
の上 日 夜 宿 食を 志す  
学 文を 辱 二日 二日  
三年の うちよ 詩 能 文 草  
ひの あり 古くより 勤 学  
せし ころ づの 平 八が 右よ ち  
ひの あり じ  
と 書 出  
よの 志す  
の あり

出關愁喜一沾裳

滿野襟

生古戰場

孤漁術先住

村樹色暗殘

雨遠寺鐘聲帶夕陽



〇 田の 様も 苗も 一日 見を 〇  
か 村の ころ ぬを 知らん 遠く  
心 あり 手 思 者も 故 家 あり  
西 三人よ 平 八よ 言 する 今 時  
生 あり せ 四よ 様 けき 〇 隔  
田の 様も 苗も 一日 見を 〇

平八郎の事をも傳へて三年と云ふ

平八郎の事をも傳へて三年と云ふ

平八郎の事をも傳へて三年と云ふ

平八郎の事をも傳へて三年と云ふ

平八郎の事をも傳へて三年と云ふ

平八郎の事をも傳へて三年と云ふ



水野軍記

豊田貢

豊田貢の事をも傳へて三年と云ふ

豊田貢の事をも傳へて三年と云ふ

豊田貢の事をも傳へて三年と云ふ

豊田貢の事をも傳へて三年と云ふ

豊田貢の事をも傳へて三年と云ふ

豊田貢の事をも傳へて三年と云ふ



平八郎の事をも傳へて三年と云ふ

平八郎の事をも傳へて三年と云ふ

平八郎の事をも傳へて三年と云ふ

平八郎の事をも傳へて三年と云ふ

平八郎の事をも傳へて三年と云ふ

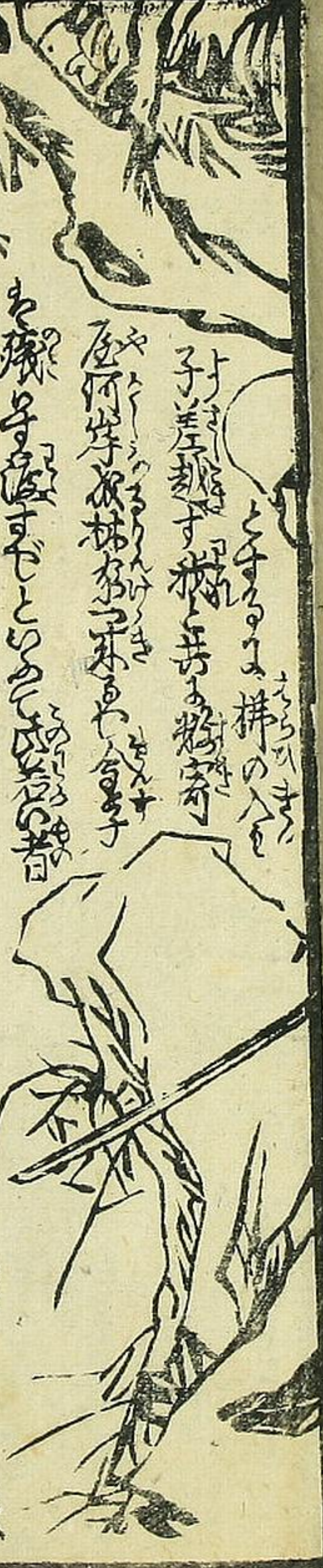
平八郎の事をも傳へて三年と云ふ

平八郎の事をも傳へて三年と云ふ



ふと、二、三夜を  
明せし平八  
も詮く、これと  
家の若者ぞ  
呼ぶと、林で  
の腰の内を  
あらわし平八  
八郎と申す者ぞ  
の傍りにて  
あつて、

宿すよ  
世に  
の傍者ぞ  
日大坂  
の傍者ぞ



子差越すれ、其の  
色河津水、其の  
も、  
を、  
何、  
方、  
合、  
の、  
志、



父の病

病の付早

上はあすむとりの難い大いなる病

さほど大いなる病の預めの上はあすむ

病の付早

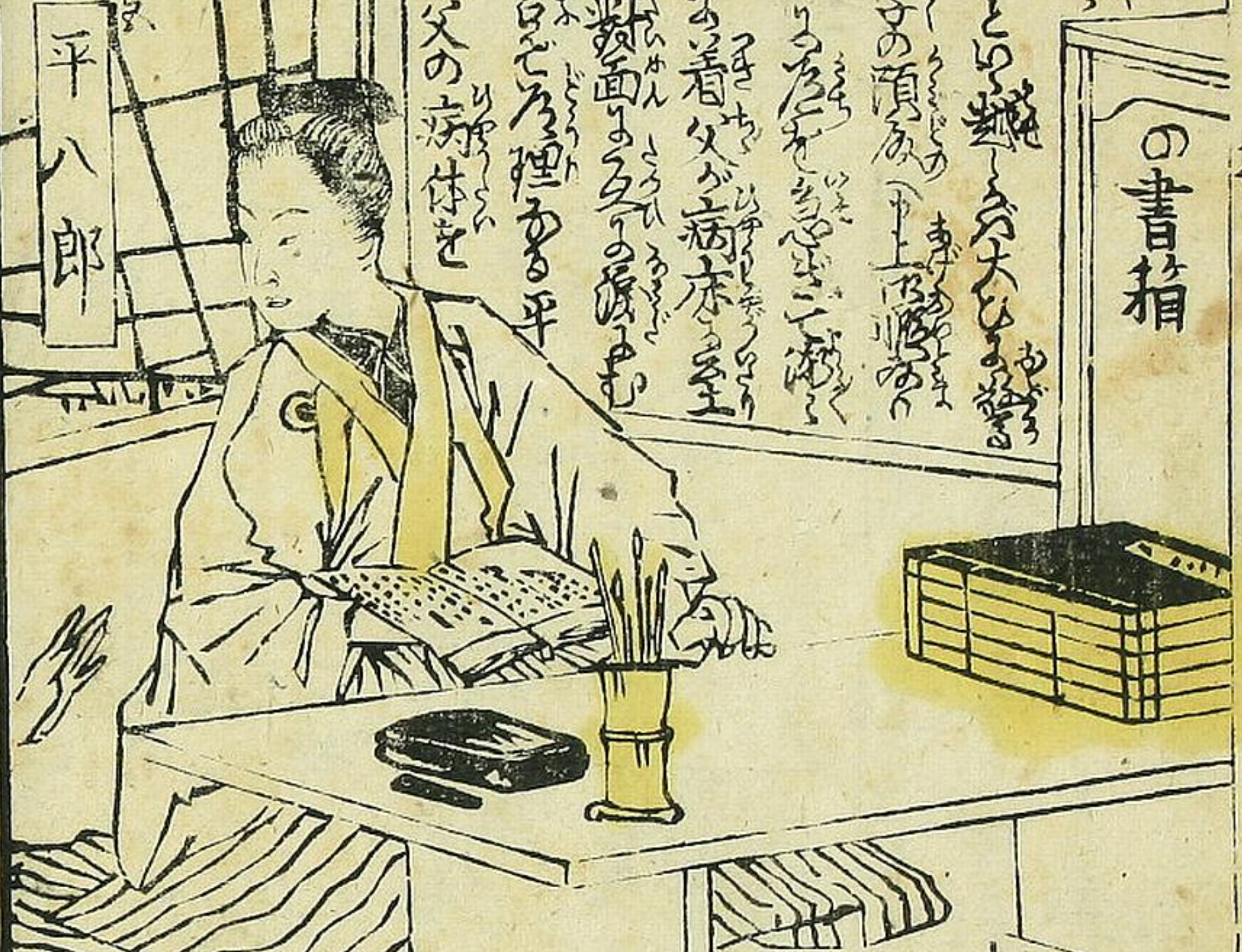
天満の宅の着父が病床を至

欠くことの敷面あるの病を

せぬ病の付早

八郎つゝ父の病体

平八郎



の書箱

死をんとする病を言こ

やあ〜今我れと母のそ

と止む〜今我れと母

教相續るる人々の病

ボウ〜今我れと母

学の者として病を言

あれ且又我れが奉

行の死を〜今我れと母

重公事〜今我れと母

るの病を専ら〜今我れと母

病を忘る事勿れ〜今我れと母

俸け〜今我れと母

病の付早

もうも年老のい

病の付早

と一言の病の付早

行の父の病の付早

らをも〜今我れと母

と見下〜今我れと母

又聖母〜今我れと母

勤学の妨げとあらんと思ふ

去らも人の親〜今我れと母

る〜今我れと母

と聞〜今我れと母

朋友



病を言こ

文武の車両輪

の如く〜今我れと母

よ〜今我れと母

ま〜今我れと母

ホ〜今我れと母

これの〜今我れと母

眼を〜今我れと母

〜今我れと母

〜今我れと母

〜今我れと母

〜今我れと母

〜今我れと母

世にあらぬ世に送りぬいと念ふいと  
 むらひけり程あり中隠すうへに  
 神をそ勤ける父の遺言をよきまこと  
 のまを信じて意欲を専らとて物事  
 正しく曲まざる事あり上成者の技  
 探すとも利する事あり下成者の技  
 非せざる事あり非せざる事あり  
 今遠か公事の後今務の物ありと  
 せしことあり有ら平八布出後より古  
 美の事あり善悪分際成り町家の  
 者も其徳と感へけり勢の剛峻ある  
 時ハ武術の文を教ふるよ  
 是の世にあらぬ世に送りぬいと念ふいと

子にまよひぬ世に送りぬいと念ふいと  
 世にあらぬ世に送りぬいと念ふいと  
 を格之助と呼び平八郎とあはれ  
 自ら直を勇と名を若者あり爰  
 一の京於て唐津浪人の水軍  
 祀との者あり成教も稲作  
 神とつらとて念ふ置  
 支丹邪法を以て  
 妖術を以て種々の  
 病  
 病  
 病  
 の世にあらぬ世に送りぬいと念ふいと



**幕府世新吉原**  
 獨音の音も悪する  
 如く諸人等とて群  
 集せりあまの角に  
 夫婦ありまのふか  
 ぬらぬ史書にゆ  
 軍宛り云やまの  
 もとに新世の世  
 禱を新と目  
 やしよの世はあがる  
 世にあらぬ世に送りぬいと念ふいと

今三年  
 平八郎  
 世にあらぬ世に送りぬいと念ふいと

一は其もまゝなり... 世のゆゑに

をも更らひと... 修法をみる... 世をよる... 身をよる... 心をよる... 法をよる... 神文をよる... 法をよる



録の松徳川日記... 釣天井守都宮奇談... 伊賀越仇討... 繁主水噴の新宿... 徳川戦記... 伊達評定書... 浪華の梅大塩話... 大久保仁政談... 小栗判官代記... 義経一代記... 藤清正代記... 忠臣蔵夜討... 百一首... 日本怪力傳... 天下茶屋仇討録... 英雄百人一首... 鬼神松松屋奇談... 佐吉伝喜真喜大話... 川中島戦記... 馬喰町出版人

地本 錦繪 問屋 木屋 小森宗次郎

